

1) 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2) 研究会基本情報

タイトル：「多言語混在状況を前提としたアフリカ記述言語学研究の新展開」（令和４年度第１回研究会）

日時：令和４年１０月８日（土曜日）午後２時より午後６時

場所：AA 研 302 室＋オンライン

セッション-1: 14:00-14:40

河内一博

「話者のコミュニティに貢献するための東アフリカの言語の記述研究に向けて」＊

若狭基道

「ウォライタ語の動名詞に関する諸問題」＊

古閑恭子

「アカン語の情報構造と韻律」＊

セッション-2: 15:00-15:40

安部麻矢

「G20 の関係節について」

品川大輔

「ケニア・スワヒリ語における cl.8 関係節」＊

米田信子

「スワヒリ語における場所格主題文―「主語」の定性を中心に―」＊

セッション-3: 16:00-16:50

阿部優子

「ベンデのクラン（mulahilo）システム」

古本真

「スワヒリ語の方言からザンジバルの社会状況を考える」

塩田勝彦

「最近の研究成果について」

仲尾周一郎

「規範を記述する：ジュバ・アラビア語談話におけるメタ言語活動を例に」＊

セッション-4: 17:10-18:00

全体討論（とくにプロジェクトの成果発信に向けて）

本プロジェクトの2022年度第2回研究会は、上記日時において14名の参加者を集めて開催された。プロジェクト初年度である2021年度の2回の研究会におけるテーマ共有(とりわけ、ポジション・ペーパーとしてのLüpke and Storch 2013 *Repertoires and Choices in African Languages*)をふまえ、その枠組み内での各自の関心や具体的なトピックについてプレゼンテーションを行った(上記プログラム中*で示したものについては、以下に、その要旨ないしハンドアウトを示す)。10名によるトークということで発表時間は短めに切り詰めつつ、フィードバックにより多くの時間を割く形で進めたことで、活発な議論が促された。これによって、各メンバーが本プロジェクトにおいて取り組むテーマのフォーカスがより明確に絞り込まれるとともに、相互の問題意識のすり合わせや理解の共有、また情報交換が行われた。最終セッションとして、成果公開の見とおしについての短い打ち合わせも行われ、具体的な発信媒体としてAA研ジャーナルの別冊の刊行を目指すことを確認した。

文責：品川大輔

(発表要旨ないしハンドアウト)

話者のコミュニティに貢献するための東アフリカの言語の記述研究に向けて

河内一博

慶應義塾大学

詳細な記述も深い研究もあまりなされていない東アフリカの言語のうち、シダーマ語(クシ語族；エチオピア中南部)とクプサビニ語(ナイル語族；ウガンダ東部)の文法の記述、辞書の編纂、語彙集の作成の計画をしている。その目的は、文法と辞書を多くの人が利用できるような方法で出版・公開することにより、語学教育が遅れ、書記体系に改善の必要がある両言語の話者のコミュニティに貢献することである。

本発表は、クプサビニ語の語彙集の作成に焦点を当てる。クプサビニ語のほとんどの普通名詞には、数(SG vs. PL)に加えて、長さ(short vs. long)の区別により4つの形式があり、多くの動詞には、方向ダイクシスを表すのに *suprafix*, *simulfix*, *suffix* の一つまたは組み合わせにより最大3つの形式があり、どちらも複雑な体系を示していることを述べ、これらをどのように語彙集としてまとめるかについて説明する。

ウォライタ語の動名詞に関する諸問題

若狭基道

1. アムハラ語の動名詞

アムハラ語は全ての動詞から「～すること」を意味する動名詞を作ることが出来る。若干の例外を除くと、各動詞の活用グループ毎に特定のパターンに従って作られる。詳

細は若狭（2021: 79）参照。

2. アムハラ語動名詞に対応するウォライタ語

それでは、このアムハラ語動名詞のウォライタ語の対応物は何であろうか。発表者の1997年の基礎語彙調査によると、以下に分けられる。

A：動詞の未完了連体形非主語指向形＋形式体言。～iyo-g-aa。

B：動詞語幹＋ett-aa。

C：動詞語幹＋uwa。

D：当該動詞に意味的に関連する名詞。

E：その他。

Aはどの動詞からも文法の知識を利用して作ることが出来る形であり、語彙の問題ではない。Alemayehu and Tereezzaa（1991 E.C.）はほぼ全ての動詞に対してこの形をも挙げている（無駄なことではある）。但し、発表者の調査でこの形が返って来ることは比較的稀であった。

発表者の調査では、BとCがよく見られるパターンであった。だが、ここには問題が存在する。

先ず、「～すること」という意味のアムハラ語の動名詞に対応するものであることが明らかな例が存在する一方で、これらに関してはAlemayehu and Tereezzaa（1991 E.C.）では別の意味（「～の仕方」「～する状況」等）が附されている場合が多い。また、「王であること、治めること」に対して出て来たkawót-ett-aa「政府」、「答えること」に対して出て来たzáár-uwa「答、回答」等はかなり具体的なものを表す名詞となっている（その点で、Dに近い）。本当にこれらは動名詞なのだろうか。

1つのアムハラ語動名詞に対し、BとCの2つが得られた場合もある。例えば、「剃ること」に対するmeed-ett-aaとmééd-uwa。では、これらの意味上の使い分けは何であろうか。

BとCは生産的なパターンと思われる。ならば、（ほぼ）全ての動詞に対し、どちらも存在するのであろうか。だが、発表者の調査の時には両方出て来たものは稀である。ならば、動詞毎にどちら（或いはその他の形）になるのか、（多くの場合）決まっているのであろうか。それはどういう基準なのであろうか。

以上は、実際に調査をすれば直ぐに判明することかも知れない。だが、コロナ禍で研究は停滞している。

そもそもこれらの「動名詞」B、Cはどういう場合に使うのであろうか。相当程度具体的な意味を持つもの（先程挙げたzáár-uwa「答、回答」等）を除けば、テキスト中には使用例が見当たらないようである。私がウォライタ語研究の最初期に集めたこれらの形は、一体全体何だったのであろうか。

実は、ウォライタ語の（恐らくは他のエチオピア諸語も）動詞を調べる時には、完了形で訊くのが一番良い。そうした事を知らなかった当時の私はアムハラ語の動名詞に対する反応を集めていた。そして、文法調査の段階で間違いに気づき、完了形を採り直し、

その後は専らその成果を調査・分析の手段として用いて来た。「動名詞」のデータは若狭（2000）でも積極的に利用することは無かった。

斯様な次第で、本発表で扱ったのは、最初期の調査で未熟さ故に発生した言わば「ノイズ」であった。ノイズを除去することでウォライタ語の動詞に関してすっきりとした成果を上げて来たのだが、調査に行けない今、発表者の耳（頭）にはこうしたノイズが復活して来た。こうしたノイズにこそ案外文法上の大きな問題が潜んでいる気がしてならない。

また、今回扱ったのは、ウォライタ語とアムハラ語の間に整然とした対応が見出せない、珍しい例である。現地でこれら2言語を行ったり来たりする時に、彼等の頭の中で何が起きているのだろうか。多言語混在状況を巡る大きな問題点である気がしてならない。

参考文献

Alemaayehu Doogamo and Tereezzaa Hayile Messqqalo (1991 E.C.) *Wolayttatto qaalatu Amaaratto birshshettaa*. Addisaaba: Tophphiyaa Doonatu Xinaatiyaanne Pilggettaa Ooso Keettaa, Addisaaba Yuniversttiyaa.

若狭基道（2000）「ウォライタ語語彙集」In: Tasaku Tsunoda (ed.) *Basic materials in minority languages* 少数言語の基礎的資料（ICHEL Linguistics Studies Vol.5）, 65-112. Department of Asian and Pacific Linguistics, Institute of Cross-Cultural Studies, Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo. （Tasaku Tsunoda (ed.) (2001) *Basic materials in minority languages 2001*, 35-82. ELPR Publication series B001.に英文要旨を加えた上で再録）

若狭基道（2021）『ニューエクスプレスプラスアムハラ語』東京：白水社。

アカン語の情報構造と韻律

古閑恭子

アカン語の焦点表現は、典型的には焦点要素に *na* を後置し、かつ文頭に置くことによって表す。この焦点構文は独特な韻律的特徴を持つが、このことに触れる研究はわずかでかつ通常と異なることを指摘するに留まっている。本発表では一次資料の提示により、*na* 焦点構文の韻律的特徴について検討する。

規範を記述する：ジュバ・アラビア語談話におけるメタ言語活動を例に

仲尾周一郎

1. はじめに

●「ノイジーな言語学」

- 「記述 vs. 規範」という対立軸（これまでにどのくらい問われている？）
- 「記述」言語学ははたして「記述的」なのか？—「現地」調査、「理想的な（生え抜きの）母語話者」、「文法性判断」、「（言語教育などの形をとる）現地還元」などのアイデアは、むしろ規範主義的ではないか。
- 「言い間違い」は適切に「記述」されてきたか？—「これは言い間違いだ」は規範主義的でないか、すべてを「これは言い間違いではない」というなら「言い間違い」は記述されない。「言い間違い」かどうかは、「科学」的にはどのように判断されるのか？
- 「記述」は、「規範」と対立しているのではなく、ダイナミズムや多様性を許容しない、固定的・伝統的規範に対して、オルタナティブな規範を提示しているのではないか。
- 記述言語学とは、本質的には不変の真実を明らかにする「科学」ではなく、インフォーマントとの共同作業による価値創造でありつづけてきたのではないか。

2. 修正とピジンの管理

- ピジンやクレオールという概念は、そのもととなった言語からの極端な逸脱によって定義づけられ、かつこの逸脱は、経験的には話者自身にとっても意識されている。同時に、基層言語と比べても質的・量的に簡素である（この事実も話者自身によく意識されている）など、単純な「混成」としては説明できないことも前提になる。
- 特にピジンについては、（ビッカートンなどの一部のクレオール学者やピジン・クレオール話者自身を含む）世間一般的なイメージとして、「ブロークンな、カタコトの言語」との差異が十分意識されていない。ピジンは「規範」という価値観から自由な、なんでも許される言語体系として想像されているのではないか。
 - 対比的に、「母語話者」をもつクレオールはこうしたイメージが誤解であることが啓蒙されてきたが、これは言語学がもつ母語話者中心主義によるものだろう。
- 言語管理理論（language management theory, 1980年代以後 J. V. Neustupný と B. Jernudd により提唱・理論化）：組織管理（言語政策、言語計画）と単純管理（談話中の修正など、話者自身によるメタ言語活動）
- 南スーダン南部の地域共通語である、ジュバ・アラビア語（本発表ではピジンとして位置づける）の談話における修正

(1) **fi junûb ta sudân kûlu, júkul gí=báda mín jom itnini.**

LOC south POSS Sudan all work IPFV=start from day Monday

bi=báda jom itnini, lahádi... jom.. jôm ta júma. [...]

IRR=start day Monday until day day POSS Friday

南スーダン全土で、仕事は月曜にはじまります。月曜にはじまり… 金曜までです。

jála jom sébit, dé bíga jôm ta ráha, jôm ta kasulu... malábis

then day Saturday DEM then day POSS rest day POSS wash:NMZ clothes:PL

áu gumasât. nás gí=kásulu gumasât bitoumon. [...]

or clothes:PL people IPFV=wash clothes:PL POSS:3PL

そして土曜、休みの日、いや服を洗う日です。みなさん自分の服を洗います。

salawât tában bi=fílu, jôm táni, itnîn saât. fi saât, I mean,
prayer:PL of.course IRR=take day other two hour:PL LOC hour:PL I mean

[日曜] 礼拝は、日によっては、2時間かかるんですが、時間…いや

a.. fi salawât, kan nâs báda séli, nâs gí=báda ma gúna. [...]

FIL LOC prayer:PL if people start pray people IPFV=start with song

礼拝では、始める時に歌で始めます。

úwo bi=wónusu hajât al gí=ámulu, wala hajât al gí=hásil fi dúniya

[...]

3SG IRR=talk thing:PL REL IPFV=do or thing:PL REL IPFV=happen LOC world

[神父] は世界でしている、いや起きていることを話します。

baad gúna dé, fi... bigullóu oratory, jani hatája.

after song DEM EXS called oratory it.means oratory

歌のあとで… オラトリイという、つまり説教があります。

nâs bi=rúwa wodí. baad hatája dé, nâs bi=séli táni [...]

people IRR=go give:PASS after oratory DEM people IRR=pray again

人々は受けます。説教のあとで、もう一度礼拝をします。

- (9) jála kamân, fi zurûf kamân fi bêt ta jába dé.

then also EXS hardship also LOC house POSS old.man DEM

máfi hája al bi=rúwa dofunú be jába,

NEG.EXS thing REL IRR=go bury:PASS with old.man

dêr kamân hája bigullóu kúfna al a..

want also thing called kufna REL FIL

be árabí teína dé a.. hája.. dum.. dumuríja al ábijed [...]

with Arabic POSS:1SG DEM FIL thing dum dumuriya REL white

さて、この[亡くなった]老人の家には困難がありました。

老人とともに埋葬するものがありました。白いクフナ… 我々のアラビア語

で

えー、なに…ドゥム、ドゥムリヤというものも要ったのです。

- (10) bíga minnâk ína mâ ágder ríja fi júba, wele fi xartûm,

then then 1PL NEG can return LOC Juba or LOC Khartoum

wa ína gí=dóuru fi liberated areas, mahâl al muhárrar al kán fógo

SPLA...

and 1PL IPFV=walk LOC liberated areas place REL liberated REL PST there SPLA

ína ámulu jógol ta tahlíl, analysis ta language de. [...]

1PL do work POSS analysis analysis POSS language DEM

nína bi=stemîr séli ínnu.. a.. lo fí nâs al bi=ágder sáadu

1PL IRR=continue pray COMP FIL if EXS people REL IRR=can help

lě=nna ténét dé min nas... ána mâ áruf bigullóu sunú be...

DAT=1PL Tennen DEM among people 1SG NEG know called what with
lakín ána bi=kélim be kélima ta ingilízi fógo. ána bi=dákalu fógo
 but 1SG IRR=say with word POSS English there 1SG IRR=enter there
afan nâs bi=árufu, umon min nâs al bigullóu minority.

so.that people IRR=know 3PL from people REL called minority

そして、それから、私たちはジュバへもハルツームへも帰れなくなり、SPLA(南スーダン人主体の反政府組織) がいた *liberated areas*、開放地区を転々となりました。私たちは分析、*language* の *analysis* をしました。[...] 私たちは引き続き祈りたいと思います。私たちテネット人… [アラビア語] で何と言うか分かりませんが、英語の単語で言いましょう。皆わかるよう [その単語を] 入れます。彼らは minority と呼ばれる人々です。

- 言語調査（談話収集）場面における話者間の規範の交渉—中層話体（mesolect）の排除
- 言語調査に際して、話者自身から「自分の判断だけではなんなので、ほかの人にも聞いたほうがいい」とクロスチェックを勧められることはよくあることでは？

(4) **jôm táni tában, ána gáid fi júba.**

day other of.course 1SG stay.PTCP LOC Juba

ある時のこと、私はジュバに住んでいたんですが、

ána gúm-ta mafê-t le kâl agí... (ána rúwa.)

1SG get.up.PERF-1SG go.PERF-1SG DAT uncle POSS:1SG 1SG go

私はオジのところへ行き…

(私は行き)

ána rúwa le kâl agí fi kortûm.

(kâl taí.)

1SG go DAT uncle POSS:1SG LOC Khartoum

uncle POSS:1SG

私はハルツームのオジのところへ行きました。

(私のオジ)

ána rúwa le kâl taí fi kortûm.

1SG go DAT uncle POSS:1SG LOC Khartoum

私はハルツームのオジのところへ行きました。

ána naman mafê-t hinâk,

(ána naman rúwa inâk)

1SG when went-1SG there

1SG when go there

私はそこへ行ったとき [継起を表す反復節]、

(私はそこへ行ったとき)

ána naman rúwa inâk, ána naman rúwa le kortûm, ána ligó kâl taí.

1SG when go there 1SG when go DAT Khartoum 1SG find uncle POSS:1SG

私はそこへ行ったとき、私はハルツームへ行ったとき、私はオジと会えました。

ána gut-ta=ló-u kâl íta kêf? galí ána kwês, weled=i.

1SG said-1SG=DAT-3SG uncle 2SG how COMP 1SG well son=POSS:1SG

私は彼に「オジさんお元気ですか」と言いました。[彼は]「元気だよ、わが子よ」と。

ána gúm-ta gut-ta=ló-u ja kâl,

(ána kélim le úwo.)

1SG got.up-1SG said-1SG=DAT-3SG VOC uncle

1SG say DAT 3SG

私はそして彼に言いました。「オジさん」

(私は彼に言いました)

ána kélím le úwo ja kâl, abúnná inná? kâl agí gâm jalân.

1SG say DAT 3SG VOC unce Tennesse greetings uncle POSS:1SG got.up:3SG angry

私は彼に言いました。「オジさん、アブナ・インナ」するとオジは怒りだしまし

た。

galí, íta lě gí=kélím le ána be rutân?.. ta tenêt dé.

COMP 2SG why IPFV=say DAT 1SG with ethnic.language POSS Tennesse DEM

「お前なんで私に民族語、テネットの、でいうんだ」と [いうのです]。

ána gut-ta=ló=u ja kâl, ána malú ána, abú taí min tenêt.

1SG said-1SG=DAT=3SG VOC uncle 1SG why 1SG father POSS:1SG from

Tenne

私は彼に言いました。「オジさん、私の何が問題ですか、私の父はテネットです。」

- 「逸脱」としての詩的言語・日常の言語、諺、歌謡

(5) **úwo bi=wónusu kalâm dé, kedé=na géní kwê,**

3SG IRR=talk speech DEM SBJV=1PL sit good

kedé=nna mâ ámulu mufákil bi néfsa tēna,

SBJV=1PL NEG make problem:PL with self POSS:1PL

kedé=nna híbu bádu tēna, kedé=nna híbu akû tēna,

SBJV=1PL love self:PL POSS:1PL SBJV=1PL love brother POSS:1PL

kedé=nna híbu akwána tēna, kedé=nna híbu ádu.. bitēna,

SBJV=1PL love brother:PL POSS:1PL SBJV=1PL love enemy POSS:1PL

áu zôl al batâl.. al mâ dêr āna.

or person REL bad REL NEG want 1PL

[神父]はこんな話をします。我々はよく生きましょう、我々同士の間で問題を起こさず、我々同士を愛しましょう、我々の兄／弟 (SG) を愛しましょう、我々の兄弟みな (PL) を愛しましょう、我々の敵を、我々を嫌がる悪き者を愛しましょう。

(6) **gwôpa gí=nútu godur gúwa tô.**

frog IPFV=jump as.much.as power POSS:3SG

カエルは自分が跳べるだけ跳ぶ。(諺)

- 都市を中心とする音楽文化ももちろん注目に値する。

3. おわりに

- 記述言語学者が「記述」しているのはある種の (オルタナティブな) 規範である。それが悪いのではなく、そのことに意識的になることで、ある種の自己矛盾に素直に向き合えるのではないか。
- 「規範」(強い威信をもつ伝統的規範) をもたない言語の話者がいかにその言語を管理し、いかに語るのか、といったメタ言語活動に関する経験事実をエスノグラフィックに提示することで、旧来の言語学の言語観をアップデートする役割を果たせるのでは

ないか。

- 言語管理理論を用いて分析されてきたのは主に「北側」（グローバルノース）の諸社会で、（大きく分けて）組織管理と単純管理の二つのレベルを認定しやすかったのではないか。アフリカを代表とする、実質的にはほぼ単純管理しか存在しない「南側」の言語社会や、ピジン・クレオールのような言語を扱うことは、この理論自体にも資するところがあるのではないかと期待する。
- ジュバ・アラビア語（本発表では「ピジン」としておく）のような言語が「どのように発生したか」だけでなく、多言語状況の中でどのようにマネージされてきたか、という大きな問題に対するアプローチに位置付けたいと考えている。

* 参加者からは、ピジン・クレオールとはレベルが違うかもしれないがその他の諸言語にも動態的な側面が存在すること、そうした言語の談話データに種々のレベルの逸脱などがみられることなどについて、調査経験に基づくコメントが寄せられた。

ケニア・スワヒリ語におけるcl.8関係節

品川 大輔 (AA研)
2022-09-27

AA研共共課題共同利用・共同研究課題「多言語混在状況を前提としたアフリカ記述言語学研究の新展開」
2022年度第1回研究会

1. ケニア (口語) スワヒリ語 (KS)

- 「標準」スワヒリ語の規範からは離れた口語 (vernacular) としての「ケニア・スワヒリ語 ((General) Kenyan Swahili, KS)」(Githiora 2018)
- その社会方言連続体の一部としてのyouth-registerとしてのSheng^[1]
- タンザニアにおけるLugha ya Mitaani (LyM) とは異なり^[2]、顕著な構造的変容を含む^[4]
- かつてShengの (innovativeな) 特徴とされたものは、現在はKS一般の特徴に溶け込んでいるものも多い^[3]

[1] Githiora (2018: 32): "Therefore on one level, Sheng is a 'sociolect' of KS [...] Which is to say that it is not separate from general KS ..." (p.32)
[2] Kiestring and Jan (2006: 51): "A third parameter of distortion which is widely attested in other urban youth languages of Africa such as Nouchi in Abidjan, Camfranglais in Cameroon and Sheng in Kenya is strikingly absent in LyM: morphological hybridisation, i.e. the deliberate combination of lexemes and affixes that do not belong to the same source"
[4] Boser (2009: 272, 281): "Whereas it appears that the grammatical, morpho-syntactic frame for Sheng comes from Swahili (and much of its lexicon too), there are fundamental differences between its structure and Swahili's [...] there are salient difference in the morphology (noun classes, tense marking, and word formation) and also in the phonology (stress, segmental process, and the syllable)."
[5] Githiora (2018: 14): "Although 'deep' Sheng talk is limited to certain in-groups and registers, its characteristic features that stood out in the past (vocabulary, pronunciation) are now much a part of general Kenyan Swahili (KS). In fact very many Sheng innovations have passed onto general KS such that they are no longer marked as belonging to in-group or youth-registers..."

2. Grammatical features (developed) in KS

▷ Summary of structural characteristics in Sheng-1 (Shinagawa 2006)
[Sh.: Sheng, KCS.: Kenyan Colloquial Swahili, StS. Standard Swahili]

characteristics	source	examples
phonology	metathesis/ Pig Latin	Jargonistic Sh. <i>dibre</i> < KCS. <i>bredi</i> < Eng. bread Sh. <i>kimbeko</i> 'cup' < StS. <i>kikombe</i> (/ki.ko.mbe/)
	devoicing of voiced (non-prenasalized) obstruents	(NE) Bantu Sh. <i>msee</i> 'friend, guy' [mʰse:] vs. StS. <i>mzee</i> 'old/respected person' Sh. <i>mase</i> < KCS. <i>maze/madhe</i> < Eng. mother
nominal morphology	shortening with -o	Nilote/Luo Sh. <i>fiso</i> (fis-o) < (StS. <i>fizikia</i>) < Eng. physics Sh. <i>kibaro</i> (ki-bar-o) < StS. <i>kibaru</i> 'day labor(er)'
	derivational use of <i>ma-</i> and <i>ka-</i>	Bantu Sh. <i>masee</i> (ma-see) 'best friend' < StS. <i>mzee/wazee</i> Sh. <i>kahatisi katoko</i> (ka-hatisi ka-toko) 'a small piece of story'

2. Grammatical features (developed) in KS

▷ Summary of structural characteristics in Sheng-2 (Shinagawa 2006)
[Sh.: Sheng, KCS.: Kenyan Colloquial Swahili, StS. Standard Swahili]

characteristics	source	examples
verbal morphology and morpho-syntax	regularization of irregular forms	Contact-induced?? simplification KCS. <i>kuja</i> [ku-j-a] 'Come! (imperative)' < StS. <i>njoo</i> KCS. <i>enda</i> (end-a) 'Go! (imperative)' < StS. <i>nenda</i>
	simplified concord	Contact-induced?? simplification KCS. <i>watu mingi</i> , <i>magari mingi</i> vs. StS. <i>watu wengi</i> 'many people', <i>magari mengi</i> 'many cars'
	lack scarcity of applicative form	Contact-induced?? simplification Sh. <i>Nunua masiwa wakeni</i> vs. StS. <i>Nunulla wageni maziwa</i> 'Buy milk for guests'
	"emphasis" marker <i>-eko</i> , <i>-aka</i> , <i>-a(n)ga</i> etc.	Bantu Sh. <i>ningependeko</i> vs. KCS. <i>ningependaga</i> vs. StS. <i>ningependa</i> 'I would like'

2. Grammatical features (developed) in KS

▷ Structural feature of relative constructions in Nairobi Swahili (c.a.'70)

"The deletion of the relative is another common feature of up-country Swahili... If the relative occurs at all in up-country Swahili, it is more likely to appear in the **amba construction**. This preference is in keeping with the favoring of isolating-analytic forms in the up-country variety." [Myers-Scotton 1979: 120]

▷ Morphosyntactic classification of relative constructions in Sheng (Shinagawa 2019)

		Position of Agr	
Marked by	Null	16	-
	Pre-stem RM	19	Pre-stem
	Post-stem RM	2	Post-stem
	Demonstrative	15	Pre-stem
	-enye	10	Pre-stem
Total	amba-	0	Post-stem
		62	

2. Grammatical features (developed) in KS

(1) ... *ni-me-pata wa-tu kama forty*
SM_{1SC}-ANT-getF 2-person like forty
w-enye (wao) come kila Sato
PP_X-REL INDP₂ come every Saturday
'So far, I have about forty people who come every Saturday'

▷ -enye as a relative marker

(2) ... *Kwa sababu... I think mimi tu the only person*
because... I think INDP_{1SC} just the only person
mw-enye na-fanya i-le ki-tu na-fanya
PP_X-having SM_{1SC}-PROG-do PP_X-DEM.F 7-entity SM_{1SC}-PROG-do
'I think I'm the only person (in the country) who does what I do'

▷ -enye as a subject RM (with high agentivity) vs. DEM as an object RM

2. Grammatical features (developed) in KS

- Focus of occurrence of major REL strategies according to syntactic properties of head nouns (Shinagawa 2019)

		S-Pa	S-Be	S	A	O-Po	O	Obl	L	T
Null										
	RM-V									
Marked by	DEM									
	-enye									

Abbreviation of syntactic environments (the head noun's grammatical relation to a relative verb): S-be: Subject of copulative verb, S-Pa: Subject of passive verb, S: (non-Agentive) Subject, A: Agentive Subject, O-Po: Object possessed by Subject, O: Object, Obl: Oblique, L: Locative, T: Temporal (for L and T, either semantic or syntactic). The number of occurrence of each strategy in each syntactic environment [counted in the corpus based on the text data from the 'Sheng Interview'; ambiguous cases are excluded]: S-Pa: Null (5), RM-V (2); S-be: DEM (5), null (1); RM-V (1), -enye (1); S: RM-V (4), -enye (4), null (3), DEM (2); A: -enye (2), RM-V (1); O-Po: -enye (1); O: DEM (2); Obl: DEM (3); L: DEM (3), Null (1); RM-V (1); T: RM (9), Null (3).

3. Current innovation? development of cl. 8 relatives

Table 1. Distribution of DEM forms according to noun class (FNS 2021)

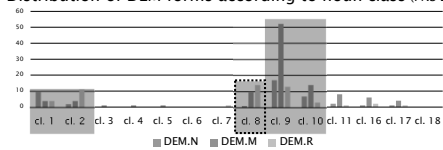


Table 2. adnominal vs. non-adnominal ratio of DEM forms (FNS 2021)

	DEM.P (h-V-PP)		DEM.M (h-PP-o)		DEM.D (PP-lle)	
	all [%]	cl.8	all [%]	cl.8	all [%]	cl.8
adnominal	22 [53.7]	0	64 [61.0]	1	17 [34.0]	0
non-adnominal	19 [46.3]	1	41 [39.0]		33 [66.0]	
total	41	1	105		50	

3. Current innovation? development of cl. 8 relatives

- vile* as a relative head: almost equivalent with *jinsi* {S-T-vyo-V} in Standard Swahili

(3) *Ni vile unaskianqa piracy.*

cf. StS: *Ni (kama) jinsi unavyosikia piracy*

'It is (like) how you listen to piracy (records)' [Kwani-03-503]

- vile* as a head of adverbial clause

(4) *Sasa inabidi enyewe sasa ujaribu vile utaeza.*

cf. StS: *... utajaribu utavoweza*

'Now, you yourself really should try as you can (in a way you can)' [Kwani-03-043]

- venye* as a relativizer? modifying an adverbial head!

(5) *Sasa, ikawa vigumu venye atanalipia kusoma French*

cf. StS: *vigumu atakavyonilipia??*

'Now, it was going to be hard in (a way) that he would pay for me to study French' [Sheng-2019-Bon-194]

3. Current innovation? development of cl. 8 relatives

- Other examples from Hip-hop lyrics 'Njeri Doobiez (Abbas Kubaff Diss)' by Octopizzo and King Kaka^[1]

(6) *Saa hii u-si-po-rap v-enye u-ko na pesa*
9.Hour DEM.P₉ SM_{25C}-NEG-R16-rap PPx8-REL SM_{25C}-EXT with 9.money

ha-ku-na mahali u-na-enda
NEG-SM_{LOC}-with LOC.place SM_{25C}-PROG-go

'When you really don't rap without money [lit. in a way that you don't have money], you have nowhere to go'

(7) *Man, ati u-ki-shika mic u-na-sema v-enye u-ko na*
Man say SM_{25C}-PART-hold microphone SM_{25C}-PROG-say PPx8-REL SM_{25C}-EXT with
nine inches kwa boxer
nine inches PREP boxer

'Man, listen, when you hold your microphone, you say like (in a way that) you have ...'

[1] The translations presented here are tentative. This information was provided from Caterina Cangelmo [pers. comm.]

4. Final pieces of thoughts

- How can *venye* be described/interpreted?

- syntactic environment/distribution
- grammatical function
- semantic features?
- pragmatic preferences??

- What are possible processes of development?

- functional expansion of cl.8?
- grammaticalization processes of *-enye*?
possessive adnominal
 - subject relative (Shinagawa 2019)
 - further functional expansion? (cf. *-enye* as a general REL in other inland varieties (Nassenstein 2015) among many others...)

2022年10月8日 AA研

スワヒリ語における場所格主題文 — 「主語」の定性を中心に—

米田信子

1

1. Introduction

Locative inversion is a construction in which the locative is fronted, and the SM agrees with the fronted locative, not with the logical subject as shown in (1a).

- (1) a. *Ukumbi-ni pa-li-baki watu wengi.*
hall-LOC SM16-NEG.PST-remain 2.people 2.many
「広間には多くの人が残っていた。」
cf. b. *Watu wengi wa-li-baki ukumbi-ni.*
2.people 2.many SM2-PST-remain hall-LOC
「多くの人が広間に残っていた。」

Locative inversion is a widespread phenomenon and perhaps one of the most well-studied inversion types in Bantu languages.

2

The locative is topicalized and fronted in (2) and (3), but the verb agrees with the logical subject, unlike the locative, where the verb agrees with the fronted locative.

Topical locative constructions

- (2) *Msitu-ni wa-me-lala simba.* LOC.V.S
forest-LOC SM2-PRF-sleep 2.lions
「森ではライオンが寝ている。」
(3) *Ua-ni wasichana wa-na-imba.* LOC.S.V
backyard-LOC 2.girls SM2-PRS-sing
「裏庭では少女たちが踊っている。」

3

2. Locative inversion in Swahili

- (4) a. *Chumba-ni ku-li-tokea macfa.* (Nakajima 2000)
room-LOC SM17-PST-occur 6.disaster
「部屋では惨事が起きた。」
cf. b. *Macfa ya-li-tokea chumba-ni.*
6.disaster SM6-PST-occur room-LOC
「惨事が部屋で起きた。」

4

Formal and semantic locative inversion

- (5) a. *Hema-ni humu m-na-weza ku-lala watu watano.* [Formal]
5.tent-LOC 18.this SM18-PRS-can INF-sleep 2.people 2.five
「このテントには5人寝られる。」
- b. *Hema hili li-na-weza ku-lala watu watano.* [Semantic]
5.tent-LOC 5.this SM5-PRS-can INF-sleep 2.people 2.five
「このテントは5人寝られる。」 (Nakajima 2000: 274)

According to Marten & Van der Wal' data (2014, table 3), only two out of 30 languages in their sample show both formal and semantic inversion, Swahili being one of them.

3. Topical locative construction

This is the construction in which the locative is topicalized and fronted like locative inversion, but the verb agrees with the logical subject. This construction in Swahili allows two word orders, one is LVS as in (6a), where the subject is placed at the **postverbal**, and the other is the LSV order as in (6b), where the subject stays at the **preverbal** position.

- (6) a. *Ndani ya shimo hili wa-na-ka-a nyoka.* LVS order
inside of hole this SM2-PRS-live 2.snakes
- b. ?*Ndani ya shimo hili nyoka wa-na-kaa.* LSV order
inside of hole this 2.snakes SM2-PRS-live
「この穴はへビが棲んでいる。」

4.1. Presence/absence of postverbal NP

- (7) a. *Msitu-ni m-na-kaa wanyama.*
forest-LOC SM18-PRS-live 2.animals
「森は動物が棲んでいる。」
- b. **Msitu-ni m-me-lala.*
(森は彼らが棲んでいる。)
- (8) a. *Msitu-ni wa-na-kaa wanyama.*
forest-LOC SM2-PRS-live 2.animals
「森は動物が棲んでいる。」
- b. *Msitu-ni wa-na-kaa.*
forest-LOC SM2-PRS-live
「森は彼らが棲んでいる。」

4. Comparison of locative inversion and topical locative construction

4.2. Verb Type

In Swahili, locative inversion is possible only with non-action verbs, such as appearance, occurrence, existence, or passive (*ingia* 'enter', *toka* 'go out', *ja* 'come', *enda* 'go' are exceptions). Therefore verbs which take an agent for the subject cannot be used in the locative inversion. On the other hand, no such restrictions for topical locative constructions, although the LVS order is less natural than the LSV order.

- (9) 「裏庭では少女たちが踊っている。」
- | | | | |
|-------------------|--------------------|----------------------|--------------------|
| a. * <i>Ua-ni</i> | <i>pa-na-cheza</i> | <i>wasichana</i> . | Locative inversion |
| backyard-LOC | SM16-PRS-dance | 2.girls | |
| b. ? <i>Ua-ni</i> | <i>wa-na-cheza</i> | <i>wasichana</i> . | LVS order |
| backyard-LOC | SM2-PRS-dance | 2.girls | |
| c. <i>Ua-ni</i> | <i>wasichana</i> | <i>wa-na-cheza</i> . | LSV order |
| backyard-LOC | 2.girls | SM16-PRS-dance | |

9

Conversely, the LSV word order is less acceptable as shown in (10c) when the subject is indefinite with non-action verb.

- (10) 「この穴はへビが棲んでいる。」
- | | | | | |
|-------------------|----------------------|------------------|------------------|--------------------|
| a. <i>Ndani</i> | <i>ya shimo hili</i> | <i>m-na-kaa</i> | <i>nyoka</i> . | Locative inversion |
| inside | of hole | this | SM18-PRS-live | 2.snakes |
| b. <i>Ndani</i> | <i>ya shimo hili</i> | <i>wa-na-kaa</i> | <i>nyoka</i> | = (6a) LVS order |
| inside | of hole | this | SM2-PRS-live | 2.snakes |
| c. ? <i>Ndani</i> | <i>ya shimo hili</i> | <i>nyoka</i> | <i>wa-na-kaa</i> | = (6b) LSV order |
| inside | of hole | this | 2.snakes | SM2-PRS-live |

10

4.3. Scope of focus

As the answer for

- (i) 'Why can't we go to the forest?'
(ii) 'Who/what is sleeping in the forest?'
(iii) 'Is it elephants or lions who are sleeping in the forest?'

- (11) 「この森はライオンが寝ている。」
- | | | | |
|---|-------------------|----------------|-------------------------------------|
| a. <i>Msitu-ni</i> | <i>m-me-lala</i> | <i>simba</i> . | Locative inversion |
| forest-LOC | SM18-PRF-sleep | 2.lions | |
| [only (i) is possible (but not preferred)] | | | |
| b. <i>Msitu-ni</i> | <i>wa-me-lala</i> | <i>simba</i> . | Topical locative construction (LVS) |
| forest-LOC | SM2-PRF-sleep | 2.lions | |
| [all (i), (ii), (iii) are possible] | | | |

11

4.4. Definiteness of the logical subject

- (12) a. *Hapo* *pa-li-kuwa-po* | *sungura*. || there16 | SM16-PST-be-LOC16 | 1.hare |
| 「そこにはウサギがいた。」 | | |
| b. **Hapo* | *pa-li-kuwa-po* | *Tom*. |
| there16 | SM16-PST-be-LOC16 | 1.Tom |
| (そこにはトムがいました。) | | |

12

When the logical subject is just 'five people' in (13), all three constructions are semantically natural and hence equally acceptable.

(13) 「このテントは5人寝られる」 **logical subject = 'five people'**

a. Locative Inversion (Nakajima 2000, Yoneda 2016)

Hema-ni humu m-na-weza ku-lala watu watano.
tent-LOC 18.this SM18-PRS-can INF-sleep 2.people 2.five

b. LVS order

Hema-ni humu wa-na-weza ku-lala watu watano.
tent-LOC 18.this SM2-PRS-can INF-sleep 2.people 2.five

c. LSV order

Hema-ni humu watu watano wa-na-weza ku-lala.
tent-LOC 18.this 2.people 2.five SM2-PRS-can INF-sleep

13

(14) 「このテントはその5人が寝られる。」

logical subject = those five people

a. Locative Inversion

**Hema-ni humu m-na-weza ku-lala wale watu watano.*
tent-LOC 18.this SM18-PRS-can INF-sleep those 2.people 2.five

b. LVS order

?Hema-ni humu wa-na-weza ku-lala wale watu watano.
tent-LOC 18.this SM2-PRS-can INF-sleep those 2.people 2.five

c. LSV order

Hema-ni humu wale watu watano wa-na-weza ku-lala.
tent-LOC 18.this those 2.people 2.five SM2-PRS-can INF-sleep

14

(15) *Hema-ni humu m-na-weza ku-lala watu watano.* =(13a)
tent-LOC 18.this SM18-PRS-can INF-sleep 2.people 2.five
「このテントは5人寝られる。=5人用のテント」

(16) *Hapo pa-li-kuwa-po sungura.* =(12a) Locative Inversion
there16 SM16-PST-be-LOC16 1.hare
「そこにはウサギがいた。」

(17) *Msitu-ni m-me-lala simba.*
forest-LOC SM18-PRF-sleep 2.lions
「森ではライオンが寝ている。」

The logical subjects in (15) is indefinite & non-specific, but in (16) and (17) are indefinite, but NOT non-specific.

15

The differences in the definiteness of the logical subject in these constructions therefore seem to represent a more fine-grained definiteness hierarchy rather than the binary values, definite vs. indefinite. The locative inversion shows a more robust tendency for its logical subject to be indefinite. The semantic difference in the logical subject in LVS vs. LSV order is not clear-cut but rather gradient, and the degree of acceptance seems to depend on the combination of definiteness and verb type.

(18)

	定 (特定)	不定 & 特定	不定 & 不特定
Locative inversion		non-action verb	non-action verb
LVS order	?action verb ?non-action verb	?action verb non-action verb	?action verb ?non-action verb
LSV order	action verb non-action verb	action verb ? non-action verb	action verb ? non-action verb

16

6. Remaining Issues

(21) 「机の上はコップが割れている。」

a. <i>Juu ya meza</i>	<i>pa-me-vunjika</i>	<i>kiokmbe.</i>	Locative inversion
top of table	SM16-PRF-be.broken	7.cup	
b. ? <i>Juu ya meza</i>	<i>ki-me-vunjika</i>	<i>kikombe.</i>	LVS order
top of table	SM17-PRF-be.broken	7.cup	
c. <i>Juu ya meza</i>	<i>kikombe</i>	<i>ki-me-vunjika.</i>	LSV order
top of table	7.cup	SM17-PRF-be.broken	

18

5. Summary

(19) Semantic restrictions

Locative inversion exhibits the following semantic restrictions

- The verb type is restricted to ‘non-action’ verbs
- The scope of focus must include the predicate + logical subject
- postverbal NP cannot be omitted

These restrictions are absent in the topical locative construction

(20) definiteness of the logical subject in these constructions

- a. **Locative inversion** : The logical subject cannot be {definite}
- b. **LVS order**: The logical subject is typically {indefinite & specific}, but neither {definite} nor {indefinite & non-specific} is banned.
- c. **LSV order** : The logical subject can be {definite} & {indefinite & (non-)specific}.

17

References:

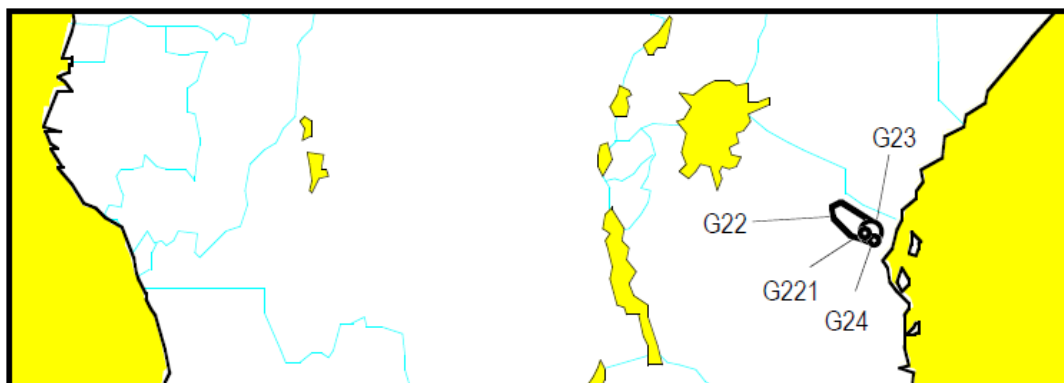
- Bresnan, Joan . 1994. Locative inversion and the architecture of universal grammar. 70(1), 72-131.
- Bresnan, Joan & Jonni M. Kanerva. 1989. Locative Inversion in Chichewa: A case study of factorization in grammar. *Linguistic Inquiry*. 20(1), 1-50.
- Buell, Leston. 2007. Semantic and formal locatives: Implications for the Bantu locative inversion typology. Bantu in Bloomsbury: Special Issue of the SOAS *Working Papers in Linguistics* 15. 107-122.
- Harford, Carolyn. 1990. Locative inversion of Chishona. In Hutchison & Mantredi (eds.) *Current Approaches to African Linguistics* 7. Dordrecht: Foris. 137-144.
- Marten, Lutz. 2006. Locative inversion in Ojibherero: More on morpho-syntactic variation in Bantu. *ZAS Papers in Linguistics*. 43, 97-122.
- Marten, Lutz & Jenneke van der Wal. 2014. A typology of Bantu subject inversion. *Linguistic Variation* 14(2), 318-367.
- Nakajima, Hisashi. 2000. *Swahili Bupou* (Swahili Grammar). Tokyo:Daigakushorin.
- Yoneda, Nobuko. 2011. Word order in Matengo (N13): Topicality and informational roles. *Lingua*. 121(5), 754-771.
- Yoneda, Nobuko. 2015. Swahili-go no bashokaku not shudaiaka (Topicalization of locative in Swahili) *Nihongo-gaku* (Japanese Linguistics) 34(12), 68-76.
- Yoneda, Nobuko. 2016. Topic-subject construction in Swahili. *Journal of Swahili and African Studies*. 27.17-36.
- Zeller, Jochen. 2013. Locative inversion in Bantu and predication. *Linguistics*. 51(6), 1107-1146.

19

G20 諸言語の関係節について¹

安部 麻矢 (大阪大学)

G20 : Shambala Group



G21	<i>see Dabida E74a</i>
G22	Pare ^{asa} , Pare-Asu, Asu, Chasu
G22A *	– North Pare
G22B *	– South Pare, incl. Gonja, Mbaga
G221	Mbugu, Kimbugu cha Kawaida, Outer Mbugu, Normal Mbugu
G23	Shambala ^{ksb} , Shambaa
G24	Bondei ^{bou}
(* = not in map)	

図 1 G20 諸言語一覧と分布 Maho (2009) より

1. G20 諸言語について

G20 の言語はタンザニア北東部 (タンガ州、キリマンジャロ州) に分布している

研究対象言語: パレ語 (Pare/Chasu)、マア語 (Mbugu/Ma'a)、シャンバー語 (Shambaa)、ボンデイ語 (Bondei)

¹ 本研究は科学研究費 (若手研究「G20のバントゥ諸語の形態統語構造の多様性に関する記述研究: 関係節を中心に」(研究代表者: 安部麻矢 課題番号: 22K13102) の助成を受けている。

2. G20 諸言語の関係節² (以降、例のなかで下線部が head noun、太字が RM)

2.1 マア語 (例は内マア語 (Inner Mbugu))

①明示的な RM がないもの

(1) já mhé ésóje lusótó ósa

já mhé é-só-je lusótó ósa
この CL1.人 S.CL1-行く-PST ルシヨト 昨日
‘昨日ルシヨトに行った人’

(2) džamáli évinigéríje viʔayú

džamáli é-ví-ni-gér-íje viʔayú
ジャマル S.CL1-O.CL8-O.1SG-与える-PST CL8.食べ物
‘私に食べ物をくれたジャマル’

②関係代名詞 1

(3) vaborá **vó** uvááhóje ósa

vaborá vó u-vá-áhó-je ósa
CL2.女の子たち RM.CL2 S.2SG-O.CL2-会う-PST 昨日
‘昨日あなたが会った女の子たち’

(4) vaʔiní **vó** tevésóma kitábu

vaʔiní vó tévé-sóm-a kitábu
CL2.子ら RM.CL2 NS.CL2-読む-FV CL7.本
‘本を読まない子ら’

③ “amba-” relative

(5) vahé **anbávo** váawáhi kusó képa

vantu anbávo v-áa-wáhi ku-só képa
CL2.人たち RM.CL2 S.3PL-PF-~したことがある INF-行く ケニア
‘ケニアに行ったことがある人たち’

(6) mhé **anbáje** sínajó na ú

mhé anbáje sínajó na ú
CL1 RP.CL1 NS.1SG-NPST-話をする ~と PRO.2SG
‘私が話をしなかった人’

どんな時制でもよく、肯定・否定もどちらでも可

² グロス以下の通り

CLn ‘noun class number’; NPST ‘negative past’; NS ‘negative subject marker’; O ‘object marker’; PF ‘perfect’; PL ‘plural’; PRO ‘pronoun’; PST ‘past’; RM ‘relative marker’; RP ‘relative pronoun’ S ‘subject marker’; SG ‘singular’; TA ‘tense and aspect marker’;

2.2 シャンバー語³

① -S-o (CL1 は -ye)

(7) kitezu uninkiyecho chizaagha

‘あなたがわたしにくれた (-nka 与える) カゴ (kitezu) がなくなった (-agha なくなる)

(8) wana watambiyewo

‘旅行した (-tamba 旅行する) 子ら (wana)’

過去の TA (-ye/-iye) のみ可能 (-za、-te、-aa はだめ)

② O-e-

(9) mghoshi **mwelawa** na Mamba

‘マンバ出身 (-lawwa 出身である) の男 (mghoshi)’

(10) wavyele **weima** kuja nkoi

‘あそこ (kuja) の畑 (nkoi) を耕す (-ima) 女たち (wavyele)’

動詞は “ゼロ時制”

③ ndi-S-o (CL1 は ndiye)

(11) mangale neamuete ng'wana ndiye timuighale shule.

‘マンガレ (人名) は私たちが学校 (shule) に連れて行こうとしている (-igha 連れて行く) 子 (ng'wana) を連れてくるだろう (-eta 連れてくる)’

(12) wabwanga ndi**wo** waize wakaishe izi mbuzi.

‘これらの山羊を放牧しに来るであろう男の子ら’

関係節内は未来時制

subject relative と object relative 以外の例がない

2.3 ボンデイ語⁴

(13) wiki mbij zekombokazo

‘2週間前’

(14) mntu mwendaeze kiyoi ni mbuyangu

‘明日来る予定の人は私の友達だ’

(15) kiti chekwacho hada kibondeka.

‘ここにある椅子は壊れている’

³ Besha (2000) より。なお、表記はスワヒリ語の正書法に準じているとみられる。ch=ʧ, gh=ɣ, j=dʒ, ng'=ŋ, sh=ʃ, y=j

⁴ 例は高村より

2.4 パレ語⁵

指示代名詞と同じ形の関係代名詞 (Kagaya (1989))

(16) mntu ulá étóngie Same ézorire iburangéti

‘サメに行った人が毛布を持ってきた’

(17) miti (ilá) tweitémie yéetiwe

‘切られた木 (PL) が持って来られた’

3. 今後焦点を当てるところ

- ・関係節内での **head noun** の統語的特性により関係節の構造がどう異なるか・言語ごとにどうか
- ・関係節内での **head noun** の意味的特徴により、関係節で表せるもの、表せないものはどのようなになっているか・言語ごとにどうか

Reference

高村美也子. 「ボンデイ語の関係代名詞フィールドノート」 MS.

Abe, Maya. 2017. “Relative clause constructions in Ma’a/Mbugu.” In Kaji, Shigeki ed. *Selected Proceedings of 8th World Congress of African Linguistics*. 169-80. Tokyo: Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

Besha, Ruth M. 2000. “Miundo ya Urejeshi katika Kishambala.” In Kahigi, Kulikoyela, Yared Kihore and Maarten Mous, eds. *Lugha za Tanzania / Languages of Tanzania*, 31-41. Leiden: Research School for Asian, African, and Amerindian Studies (CNWS).

Kagaya, Ryohei. *A Classified Vocabulary of the Pare Language*. Tokyo: ILCAA (Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa).

⁵ 例は Kagaya (1989) より